

## 学位論文題名

## 近世・近代期における「はず」の変遷

## 学位論文内容の要旨

この論文では、(1) 名詞「はず」からモダリティ形式「はずだ」へという文法化の過程を明らかにすること、(2) 「はず」の変遷を通して、近世・近代期から現代にいたるモダリティ体系を考察すること、(3) 現代語モダリティ形式「はずだ」の包括的な記述のために、「はず」に関わる変遷の全体像をとらえることを目的としている。

第1章では、上に述べた三つの研究の目的を示し、文法化・モダリティという概念に関する本論文の立場を明らかにした。また、本論文が、用例を集計し、独立性の検定を行うなど、計量的手法を用いていること、そして、現代語と古語を対照させて説明を行う、史的対照という方法をとっていることを述べた。

第2章では、「はずではない」の減少と、「はずだ」の意味(当該の「はずだ」が推論過程を含むものであるか否か)に着目し、「はず」の文法化の過程を論じた。モダリティ形式「はずだ」は近世の寛永から元禄の頃に出現するが、これは、抽象概念を表す形式(はずだ/はずがない[機能動詞結合]→はずだ/はずではない[文末名詞+だ])→モダリティ形式(はずだ/はずがない)という変化を提示する。また、近世期にさかんに用いられ、そののち衰退した、詠嘆を表す「はずのことだ」、単独で用いられる「そのはず」、近世期末における用法上の制約の変化など、「はず」の意味・用法について包括的に記述した。

第3章では、「はずではない」について、近世期から現代までの変遷を記述した。初期には直接否定だけであった「はずではない」の用法は、そののち、反語表現・連体法などの用法を加え、現代語では、①直接否定「はずではない」、②非過去形反語表現「はずではないか」、③非過去形連体法「はずではない+N」、④過去形否定「はずではなかった」、⑤「こんなはずではない」、⑥過去形反語表現「はずではなかったか」、⑦「こんなはずではなかった」、⑧過去形連体法「はずではなかった+N」の八つの用法であることを示した。そして、これら八つの用法は、近世期には直接否定、近代期には非過去形反語表現、現代語では非過去形反語表現・過去形反語表現・「こんなはずではない」「こんなはずではなかった」が、それぞれ主な用法となっていることを計量的に示した。さらに、過去形連体法「はずではなかった+N」は、ごく近年に出現した可能性があることを指摘した。

第4章では、「はず」の二つの否定表現「はずではない」「はずがない」の慣用的用法である、「こんなはずではない/こんなはずではなかった」「そんなはずはない」をとりあげ、この二つの用法がほぼ同時期、明治後期(1888-1911)に出現していることを示した。また、「こんな」「そんな」が交替した、「そんなはずではなかった」「こんなはずはない」などの類型が存在することを示し、それらの類型の出現理由について考察した。

第5章では、近世・近代期における、「はず」に上接する「う(む)」について論じた。第一に、「う(む)」は、「はずだ」「はずがない」「はずの」などの「はず」形式のうち、「はずがない」にほぼ専用の上接する、という先行研究の指摘を計量的に確認し、その働きが「事態が現実ではないことを示す」ものであることを論じた。第二に、「はず」に上接する「う(む)」は、近世期から近代期末にかけて出現率がゆるやかに下降しているが、これは助動詞「う」の連体法が減少した結果、起こったものであることを論じた。第三に、「はず」に上接する「う(む)」は、近代期に入ると、意志性のない述部に下接する、「あろう」「できよう」などの例が多くなるが、これは「食べよう」「行こう」などの「意志性のある述部+う」に対して、推量ではなく、意志の解釈が優先するようになったためであることを論じた。さらに、現代語では、近世・近代期には用例のない「だろう」が「はず」に上接する例が出現していることを指摘した。

第6章では、近世・近代期における、「はず」に上接する、「べき」「べからざる」「なければならない」「てはいけない」等の当為・禁止の表現について論じた。第一に、当為・禁止の表現が「はず」に上接する例は、近世期から近代期初めにかけて増加し、そののち減少に転ずるが、近世期から近代期初めにかけての増加は、その時期の「はず」から当為を表す意味・用法が失われかけた結果生じたものであり、そののちの減少は、「べき」が単独でそれまでの「べき+はず」の意味を表すようになったからだと考えられることを論じた。第二に、「はず」に上接する「なければならない」は近代期にはまだ少なく、「べき」の用例がはるかに多いが、「なければならない」の割合は、明治前期(1868-1887)から大正期(1912-1926)にかけて増加しており、これは、「はず」の上接位置で当為を表す新旧モダリティ形式が混在しつつ、やがて交替へ向かう状況を示していることを論じた。第三に、近代期には、「べき」「べからざる」が連体法「はずの」に上接する割合が増加しているが、これは、旧形式である「べき」が、まず終止法「はずだ」で失われていったことを示していると論じた。

第7章では、「はず」という個別の言語現象を越えた、モダリティ体系・名詞からモダリティ形式への変化の過程など、原理としての文法記述が今後の課題であることを述べた。

# 学位論文審査の要旨

主 査 教 授 池 田 証 壽

副 査 教 授 富 田 康 之

副 査 准教授 加 藤 重 広

## 学 位 論 文 題 名

### 近世・近代期における「はず」の変遷

日本語史研究において古くから自立語（内容語）から付属語（機能語）への変化は注目されてきたが、近年、「文法化」という新たな研究方法の枠組みの中で、この問題の理論的・実証的研究がより深化・発展している。このような研究状況を踏まえて、この論文では、事柄を当然そうであるに違いないと推定する「はずだ（筈だ）」をとりあげて、近世初期から現代にいたるまでの日本語資料を詳細かつ丹念に調査して、その変遷を記述したものである。「はずだ」は、これまでの日本語史研究では「推量の助動詞」に相当するが、この論文では、近年の現代語研究の成果との対照を意図して、モダリティ形式「はずだ」として論述を進める。

「はず」は、弓の弦を受けるところ（弓筈）、矢の上端で弓の弦をかけるところ（矢筈）の意味を表す名詞であったのが、矢筈と弦とはよく合うところから物事が当然そうなること（道理・筋道）の意味を表すようになり、転じて予定・手筈・約束の意味になったとされる。

この論文では、（１）名詞「はず」からモダリティ形式「はずだ」へという文法化の過程を明らかにすること、（２）「はず」の変遷を通して、近世・近代期から現代にいたるモダリティ体系を考察すること、（３）現代語モダリティ形式「はずだ」の包括的な記述のために、「はず」に関わる変遷の全体像をとらえることを目的としている。

「はずだ」は、「つもりだ」「わけだ」などと同様に、名詞からモダリティ形式への変化の様相が観察できる好個の事例であり、これまでも関心を持たれていたが、とりわけ、山口堯二（2002）によって、近世期における「はず」の比喩的意味がひろがり、「はず+だ」の述語の用法、さらに「はずだ」の推定辞化（モダリティ形式への変化）のおおよそが概観された。この論文ではそれを詳細かつ徹底的に再検討して確固たる用例を多数収集・記述するとともに、特に「はずではない」「はずがない」との関連からモダリティ形式を論じた点に大きな特色があり、この方面の研究を格段に前進させたと言える。また近世期を4期に、近代期を3期に区分して、数千例に及ぶ用例を収集・整理し、計量言語学的手法で分析した点も特色である。例文の豊富さと説明の丁寧さにも特色があり、第2章では246例、第3章では104例、第4章では57例、第5章では24例、第6章では19例を例示し、懇切に論述している。近世語の研究は、前期上方語と後期江戸語とに区分し、階層・年齢・性別等の位相を勘案して分析するのが常套であるが、この論文ではその方法を取らない点が問題として指摘はできるものの、「はずだ」に関しては、その方法はあまり有効でないことを示唆するもので、

今後、「つもりだ」「わけだ」など対比した分析が期待されるものである。

この論文の中核をなすのは第2章であるが、そのもととなった論文は日本語文法学会の機関誌『日本語文法』に掲載され、高い評価を受けており、「はずだ」に関する研究論文として必読の位置を占めている。「はず」の用例の収集に数年を要し、論文完成への道は険しかったがそれに見合う成果をあげていると評価できる。

以上のように、この論文は近世・近代期における「はず」の変遷を論じて、そのモダリティ形式の成立と展開を詳細に解明したものと評価でき、当委員会は全員一致して、本論文を博士（文学）の学位授与に相応しいと判断した。